

The background of the cover is a photograph of a room corner. On the left is a dark wood-framed window with multiple panes, through which some greenery is visible. Sunlight streams in from the window, casting a warm glow and a shadow of the window frame onto the white wall. In the center-right, a vintage typewriter sits on a stack of books on a small wooden table. In the foreground, a green plant with long, thin leaves is on the left, and a brown leather armchair is on the right.

La Comédiathèque

向かいの窓

Jean-Pierre Martinez

comediatheque.net

著者および上演権

ジャン＝ピエール・マルティネスの戯曲は、無料でお読みいただき、ダウンロードすることができます。

ただし、プロ・アマチュアを問わず、公の場で上演する場合には、事前に著者の許可を得る必要があります。また、上演には所定の著作権使用料が発生する場合があります。

ジャン＝ピエール・マルティネスの作品の上演許可を希望される場合は、著者本人に直接お問い合わせください。

<https://jeanpierremartinez.net/en/contact-2/>

向かいの窓

Jean-Pierre Martinez

ジャン＝ピエール・マルティネス

翻訳・翻案：著者

自殺を考えている老作家のもとへ、飼い猫をなくしたという若い女性が突然現れる。その訪問が、彼の人生を変えていく……

登場人物

アレクサンドル

マディソン

© La Comédiathèque

パリのアパートマンの居間。どこかボヘミアンな雰囲気。小さな机の上には古いタイプライターといくつかの書類ファイルがある。六十代、あるいはそれ以上の作家アレクサンドルが入ってくる。無造作に見せながら、どこか計算された服装。手には輪を作ったロープを持っている。天井を見上げ、椅子に乗ってロープを掛ける場所を探すが、気に入る場所が見つからず椅子から降りる。机に座り、疲れたようにため息をつく。引き出しを開け、煙草の箱から一本取り出して口にくわえる。しかし火をつけず机に戻し、代わりに拳銃を取り出す。長い間それを見つめる。ドアを軽く叩く音。考え込んでいて気づかない。銃口をこめかみに当てる。もう一度、今度は少し強くノックの音。それでも気づかない。引き金を引くのをためらうように目を閉じる……その瞬間、若い女性が目の前に飛び込んでくる。マディソン。二十代から三十代くらいの学生で、服装は比較的きちんとしている。

マディソン（叫んで） — だめ！

驚いたアレクサンドルは飛び上がり、立ち上がるとマディソンに銃を向ける。

アレクサンドル — 動くな。撃つぞ！

マディソン — 撃たないでください、お願いします！

アレクサンドル — 手を上げる！

若い女性はすぐに両手を上げる。

マディソン — ほら、何も持っていません……お願いしますから、銃を下ろしてください。

害はなさそうだと分かり、彼は銃を下ろす。

アレクサンドル — ここで何してるんだ？ そもそも、どうやって入った？

マディソン — 全部説明します……ちょっと息を整えさせてください……

アレクサンドル — 正気か？ 心臓が止まるかと思ったぞ！

マディソン — すみません、ドアが少し開いていて……

アレクサンドル — それで、どうぞお入りくださいって意味だと思ったのか？

マディソン — そういうわけじゃ……

アレクサンドル — 何が目的だ？ 泥棒か？ ここには盗むほどの物なんてないぞ。

マディソン — 私、近所に住んでいるんです。

アレクサンドル — 隣の部屋？ 隣は八十歳のおばあさんだぞ……

マディソン — 隣じゃなくて、向かいです……（客席側にある想像上の窓を指して）あの窓が、私の部屋の窓です。

アレクサンドル — 向かい？ 何年も空き部屋だったはずだ。

マディソン — 今は違います。

アレクサンドル — それで？

マディソン — 猫がいなくなったんです……見かけませんでしたか？ もしかして、ここで保護していたり……私みたいに、招かれてもいないのに入り込んでいたり。

アレクサンドル — 残念ながら見てないな。どうやら君の猫のほうが君より礼儀を知っているらしい。

彼女はひどく落ち込んだ様子を見せる。

マディソン — もう二日も帰ってこないんです。名前と写真を入れたチラシを近所中に貼りました。見ませんでした？

アレクサンドル — めったに外に出ないし、そういうチラシも見ない。第一、猫の顔なんて見分けがつかない。

彼女は部屋の中を少し歩き回る。

マディソン — トーフ！ トーフ！

アレクサンドル — 何を大声で叫んでるんだ？ 具合でも悪いのか？

マディソン — 猫の名前です。トーフ。

アレクサンドル — 猫の名前がトーフ？ 冗談だろ……

マディソン — 本当です。どうして？

アレクサンドル — 分かった。猫の名前はトーフ。二日前から帰ってこない。でも、そこまで深刻な話か？

マディソン — もちろん深刻です！ 早く見つけないと死んじゃうかもしれない。ずっと室内で育った猫なんです。外で一人で生きるなんて無理です。

アレクサンドル — それはお気の毒に。私が若い頃、猫は外を歩き回るものだった。田舎とか、せめて庭のある家でな。ネズミを追いかけて、何も捕れなかった時だけ家に戻ってきて、餌をもらい、少し撫でてもらって、ソファで寝る。それで十分だった。

マディソン — でも、この子はネズミなんて食べません。ベジタリアンなんです。

アレクサンドル — 何だって？

マディソン — 私が肉を食べないので、猫も食べません。

アレクサンドル — じゃあ、何を食べる？

マディソン — キャットフードです！ 野菜入りの。私と同じで。

アレクサンドル — 君もキャットフードを食べるのか？

マディソン — たまには。もちろん猫用じゃありません。

アレクサンドル — ベジタリアンの猫か……そんなものがあるとは知らなかった。それでトーフって名前なのか？

マディソン — ええ……それに、ちょっとおかしな子なので。

アレクサンドル — 肉を食わないのも、もちろん本人の意思なんだろうな？

マディソン — 少なくとも、文句は言ったことはありません。

アレクサンドル — じゃあ今どきは、サーカスのトラやライオンにも野菜入りの餌をやるのか？

マディソン — 知りません……そもそも、私はサーカスで動物を使うことに反対ですから。

アレクサンドル — でも室内飼いの猫には反対じゃない。

マディソン — ペットは飼っていないんですね。

アレクサンドル — ああ。「飼いなす」という考えそのものが嫌いなんだ。動物に限らずな。（少し脅すように）私自身、まだ野生のままだ。

彼女は少しもひるまず、部屋を見回す。

マディソン — つまり、うちの猫は見えていない？

アレクサンドル — 君のヴィーガン猫は見えていない。悪いが、このばかげた会話はもう十分だろう。

彼女が突然動きを止める。

マディソン — 静かに！

アレクサンドル — 何だって？

マディソン — 今、鳴き声がしませんでした？

アレクサンドル — 猫の？ いや。私は少し耳が遠くなってきてね。歳を取るのも悪いことばかりじゃない。特に近所にうるさい人間がいる時はな。

マディソン — 私は静かに暮らしています。本当です。だって一か月以上も向かいに住んでいるのに、あなたはずっと空き部屋だと思っていたでしょう？

アレクサンドル — なるほど。君の存在に気づかなかった。それなら今後もそうであってほしい。ほかに用がないなら、私は私の用事に戻る。君は猫探しに戻ってくれ。

マディソン — 分かりました。これ以上お邪魔しません……

アレクサンドル — ありがとう。

彼女は帰りかけるが、思い直す。

マディソン — でも……このまま一人にして帰るのは気になります。

アレクサンドル — このままって？

マディソン — だって……私が入ってきた時、あなたは……

アレクサンドル — 何だ？

マディソン — その……あまり大丈夫そうには見えませんでした。

アレクサンドル — どうしてそう思う？

マディソン — こめかみに拳銃を当てていたからです。

彼はまだ手に持っていた拳銃を、初めて思い出したように見る。

アレクサンドル — ああ、これか。それが？

マディソン — その……少し、落ち込んでいるんじゃないですか？

アレクサンドル — 落ち込んでる？ お嬢さん、私が君くらいの歳だった頃、若者の合言葉は「激しく生きて、若く死んで、美しい死体を残せ」だった。聞いたことは？

マディソン — ジェームズ・ディーン……

アレクサンドル — コンドームも使わず、ヘルメットもかぶらずバイクに乗り、成分なんて誰も知らないようなものまで平気で口にしていた……それから五十年。あの時代を生き延びた私みたいな老人たちが、今じゃワクチンが怖いと街でデモしている。これで落ち込むなというのか？

マディソン — 分かる気がします……

アレクサンドル — 分からないさ。だが、運悪く私の歳まで生きれば分かる。老いは、難破船みたいなものだ。

マディソン — ずいぶん暗い比喻ですね。

アレクサンドル — 昔から似たようなことは言われてきた。歳を取るっていうのは、ジェームズ・ディーンの『理由なき反抗』から、墓場を前にした回想録へ移るようなものだ。

マディソン — きれいな言い方ですね。

アレクサンドル — そうか？ 問題は今の若者が、最初から老人みたいに振る舞ってることだ。

マディソン — どの時代の若者も、世界を変えたいと思ってきたんじゃないですか？

アレクサンドル — 今の若者は世界を変えたいんじゃない。地球を救いたいんだ。しかも、かなり手遅れに見える。

マディソン — あなたたちの世代は、世界を変えられたんですか？

アレクサンドル — いや。でも、少なくとも大いに楽しんだ。

マディソン — 今はあまり楽しそうじゃありませんね。

アレクサンドル — 君もな。そうでなければ、猫を恋人代わりにほしないだろう。

マディソン — 少なくとも、一人じゃありません。

アレクサンドル — それで本気で地球を救えると思ってるのか？ 何も頼んでいない肉食動物に、野菜入りの餌を食べさせて？

マディソン — 分かりません。でも世界を変えるなら、まず地球が残っていないと。沈みかけたタイタニック号の上で革命をしても仕方ないでしょう？

アレクサンドル — いずれにしても、三十歳になる前に死んだ同世代がうらやましいよ。ジミ・ヘンドリックスやジャニス・ジョプリンが老人ホームで、カードゲームの合間に健康の心配を語り合ってる姿なんて想像できるか？ そんなものを見るくらいなら死んだほうがまだ。

マディソン — そんなこと言わないでください。

アレクサンドル — 残念ながら文学はロックンロールじゃない。作家はたいていベッドの上で死ぬ。

マディソン — 作家なんですか？

アレクサンドル — 君には関係ない。どうしてこんなことまで話してるんだ。私は君を知らない。そもそも、まだここで何してる？

彼は拳銃を引き出しにしまう。

マディソン — 怪我をするところでしたよ。

アレクサンドル — 君を殺すところでもあった。人の家に勝手に入ると、そういう危険がある。正当防衛だと言え、無罪で済んだかもしれない。（彼女が少しふらつくのに気づき、心配して）大丈夫か？

マディソン — すみません、すぐ治ります……お水を一杯いただけますか？

彼は少しためらう。

アレクサンドル — 少し座っている。持ってくる。

彼が出ていくと、彼女はすぐに元気を取り戻し、部屋の中を観察する。机の上の額入りの女性の写真を手に取り、じっと見る。アレクサンドルが水の入ったグラスを持って戻ってくる気配に、慌てて写真を元に戻す。彼はグラスを差し出す。

マディソン — ありがとうございます……

彼女はグラスを受け取り、一気に飲み干す。

アレクサンドル — 少しは良くなった？

マディソン — はい、ありがとうございます。

彼は少し態度を和らげようとする。

アレクサンドル — こんな迎え方をして悪かった。人に会う習慣がなくなっていてね。

マディソン — じゃあ、あなたも一人暮らしなんですね。

アレクサンドル — そんなに顔に出てるか。

マディソン — 今のお話を聞くと、子どももいないんでしょう？

アレクサンドル — どうしてそう思う？

マディソン — いるんですか？

アレクサンドル — いない。今の世界を見ると、いなくて良かったと思うよ。

マディソン — そうですか……

アレクサンドル — 地球を救いたいなら、まず子どもを作るのをやめればいいんじゃないか？

マディソン — でも、子どもを作るのをやめてしまったら、人類を救ったことになるんでしょうか？

アレクサンドル — それでもフランスは、世界でもいちばん暮らしやすい国の一つのはずなんだがな。

マディソン — ええ。だから私は、ここに住んでみたいと思ったんです。

アレクサンドル — フランス人じゃないのか？

マディソン — マディソンです。アメリカ人です。

アレクサンドル — それにしてはフランス語が完璧だ。訛りもない。

マディソン — 祖母がフランス人なんです。祖母にフランス語を教わりました。パリに来たのは、ソルボンヌで文学を学ぶためです。

アレクサンドル — それで今日こうして私の前に現れたのも、ただの偶然だと……マディソン。

マディソン — あなたはアレクサンドル、ですよ？

アレクサンドル — どうして知ってる？

マディソン — 下の郵便受けに名前がありました。アレクサンドル・ドラクロワ……もしかして、あの……

アレクサンドル — 画家のドラクロワの親戚かって？ 違うよ。

マディソン — 画家じゃなくて、作家のドラクロワです！

アレクサンドル — アメリカ人の君がアレクサンドル・ドラクロワを知ってるとはね。フランスじゃ、もう誰も覚えていないのに。

マディソン — 大げさです。文学を読む人ならみんな知っています。フランスの外にも読者はいます。で……？

アレクサンドル — ああ……私だよ。

マディソン — 本当に？ 二十世紀の文学にいくつも名作を残した、あの伝説的な作家アレクサンドル・ドラクロワ？

アレクサンドル — 君がそう言うなら。

マディソン — 何年も新作を出さず、誰にも会わず、取材も全部断っている謎の作家……本当にあなたなんですか？

アレクサンドル — 私の家に勝手に入ってくる前から知っていたんじゃないか？ 違うか？
彼女は一瞬ためらう。

マディソン — ……はい。正直に言うと。

アレクサンドル — じゃあ猫の話は、私からインタビューを取るためにでっち上げたのか。

マディソン — 猫のことは本当です。誓います。でも、あなたの向かいに住み始めた時、別の考えもあったのは事実です。

アレクサンドル — 私を覗き見るために、わざわざ向かいの部屋を借りたのか？

マディソン — 覗き見るなんて！ そんなつもりじゃありません。私はあなたの作品の大ファンなんです。パリに来てから連絡を取ろうとしました。でも代理人を通して、「誰にも会いたくない」と断られました。

アレクサンドル — その言葉の、どこが理解できなかった？

マディソン — あなたに会うために大西洋を渡ってきたんです。ちょうど部屋も探していて、向かいが空いていると知って……迷わず借りました。

アレクサンドル — 完全にどうかしてる！ これ以上つきまったら、警察に通報するぞ。そもそも私に何を求めている？ 記者か？

マディソン — 学生です。言ったでしょう。ニューヨークで、あなたの作品について修士論文を書きました。それから研究を続けるためにパリへ来たんです。あなたの小説の多くは、この街が舞台ですから。アメリカ人にとって、パリは今でも世界でいちばんロマンチックな街なんです。

アレクサンドル — そんな絵葉書みたいなパリのイメージで、私の作品の奥にあるものが分かると思うのか？

マディソン — 論文のタイトル、聞きたいですか？

アレクサンドル — 聞きたくない。

マディソン — 『アレクサンドル・ドラクロワの小説世界における〈不在〉の表象』。

アレクサンドル — よく分かってるじゃないか。私は人間の「不在」が好きなんだ。特に君の不在がね。だから帰ってくれ。

マディソン — 生きている作家を研究できるなら、会ってみたいと思うのは当然です。本人を少し知れば、その作品ももっと理解できるかもしれない。

アレクサンドル — それが間違いなんだ。作品だけ読んで、作者のことなんて何も知らないほうがいい。偉大な作家が、人間としては実につまらないことも多い。時には、とんでもないろくでなしだ。作家に限らない。芸術家も科学者も同じだ。天才は、知らないままのほうがいいことが多い。まあ安心してくれ。私は自分を天才だとは思ってない。

マディソン — ご謙遜は分かります。でも、『カルチェ・ラタン年代記』の作者に独占インタビューができれば、私の研究にとって最高の締めくくりになります。

アレクサンドル — 読んだのか？

マディソン — あの小説を読んで、パリで勉強したいと思ったんです。私は、あなたの最高傑作だと思っています。

アレクサンドル — いちばん売れた本ではないけどな。

マディソン — かなり自伝的な作品なんでしょう？

アレクサンドル — 言っただろう。作者の人生なんて、読者にはどうでもいい。

マディソン — それに、何年も書き続けているという謎の原稿もあるそうですね。

アレクサンドル — 何も書いてない。出版社が、世間に私を完全に忘れさせないために流している噂だよ。昔の本が少しでも売れ続けるようにな。とにかく、インタビューは受けない。君にも、誰にも。（威圧するように近づいて）さあ、出ていけ！

しかし彼女は出ていかず、正面から彼に向き合う。

マディソン — いやです！

彼は、その強い態度に驚く。

アレクサンドル — 何だって？

マディソン — インタビューを受けてもらうまでは、自殺なんてさせません。そのためなら、大西洋だって泳いで渡れます！

アレクサンドル — なら帰りは足こぎボートでどうぞ。私には関係ない。

彼女はまた気を失いそうになる。

アレクサンドル — これで二度目だぞ、私の前で倒れかけるのは。恋愛小説の読みすぎじゃないか？ 今どき、嫌なことを言われるたびに女性が気絶するなんて、舞台の上くらいだ。

マディソン — 演技じゃありません。本当に。

彼は少しためらう。

アレクサンドル — 救急車を呼ぼうか？

マディソン — いいえ。でも少し座らせてください。

アレクサンドル — それが済んだら帰る？

マディソン — 約束します。

彼女は座り、息を整える。

アレクサンドル — 水はもう一杯やったな……コニャックでも飲むか？

マディソン — とどめを刺すつもりですか？

アレクサンドル — もう遅い。最初に撃っておけば、正当防衛で通せたかもしれない。今となっては計画的だったと思われる。

マディソン — どうして家に拳銃なんて置いてあるんですか？

アレクサンドル — もともとは、招かれざる客を追い払うためだった。どうやら効き目が足りないらしい。

マディソン — 作家には人嫌いが多いいえ……人には誰かが必要でしょう？

アレクサンドル — 猫を飼え、とでも言うつもりか？ 君の猫を私に押しつけないんじゃないだろうな。

マディソン — 一人でいるのは、つらくないんですか？

アレクサンドル — 孤独はコーヒーみたいなものだ。最初は少し苦い。やがて慣れる。そのうち好きになる。そして最後には、ないと生きられなくなる。

マディソン — 名言集を書いたらどうです？ きっと売れますよ。

アレクサンドル — そもそも「一人じゃない」って何だ？ 誰かと暮らして、一年じゅう同じくならない話をするとか？ 家族や友人に時々会って、揉めそうな大事な話題だけは避けるとか？ 階段で近所の人に来て天気の話をするとか？ 猫が分かってくれているふりをして話しかけるとか？

マディソン — でも作家は、書く時には誰かに向かって語りかけているでしょう？

アレクサンドル — だから書くのをやめたんだ。

マディソン — 信じません。

アレクサンドル — 信じてくれとは言っていない。放っておいてくれと言ってる。

マディソン — じゃあ、やっぱりインタビューはだめ？

アレクサンドル — もう何も言うことがない。もっと悪いことには、話したい相手もいない。自分自身にさえ話しかけたくない日もある。

マディソン — 悲しいですね。

アレクサンドル — 人生なんてそんなものだ。どのみち、私の人生は終わりに近い。

マディソン — 私のも……そうかもしれません。

アレクサンドル — 君は私より四十歳も若い。娘でもおかしくない。

マディソン — 孫でもおかしくないですよ。

アレクサンドル — ご親切にどうも。いずれにしても、君の人生は始まったばかりだ。

マディソン — そう……でも、もうすぐ終わるかもしれません。

アレクサンドル — どういう意味だ？

マディソン — 心臓の病気があります。医者には、あと数年、もしかすると数か月しか生きられないと言われています。それでフランスに来たんです。最後の夢をかなえるために。あなたに会うために……

彼は明らかに動揺する。

アレクサンドル — 心臓の病気って？

マディソン — 生まれつき心臓に異常があって、とても弱いんです。いつ止まってもおかしくありません。

アレクサンドル — さっき何度も具合が悪くなったのは、そのせいかな？

マディソン — 少しでも動揺すると、心臓が激しく動いて、そのまま止まってしまうこともあります。

彼は一瞬、疑うように彼女を見る。

アレクサンドル — まさか、私に逆らわせないためにその話を作っただんじゃないだろうな。つまり、インタビューを断れないように。

マディソン — 残念ながら、本当です。

アレクサンドル — それは……気の毒だ。

マディソン — あなたのせいじゃありません。

アレクサンドル — いや、なんという皮肉だ。私は老いて、何にも興味がなくなり、死ぬことを考えてる。君は若く、人生が目の前にあるのに、その心臓に裏切られる。

マディソン — 変えられないことなら、怒っても仕方ありません。

アレクサンドル — それでも笑っていただけるのか。

マディソン — 残された数か月が、人生でいちばん幸せな時間になるかもしれないと思っています。

アレクサンドル — 君の生きる喜びを見ると、こっちが落ち込む。迷うことはないのか？

マディソン — 迷っている時間がないんです。だから、あなたのドアを押して入ってきました。

間。

アレクサンドル — 本当に、助かる望みはないのか？

マディソン — 移植なら。でも、ドナーが見つければの話です。

アレクサンドル — 私の心臓をやろうか。もう使い道もない。私が自殺して、臓器を君に寄付する。

マディソン — そんなに簡単じゃありません。特に心臓は。腎臓や肺みたいに、左右にある臓器とは違いますから。

アレクサンドル — 睾丸とか。

マディソン — 心臓の場合、ドナーは脳死である必要があります。

アレクサンドル — 脳死？ 時々、自分はもうそうなんじゃないかと思うよ。私の周りにも、そう見える人間は大勢いるが。

マディソン — ドナーが亡くなっていて、心臓は健康で、しかもすぐに摘出できなければいけません。そんな条件がそろふことは、めったにないんです。移植を待っている患者も大勢います。

アレクサンドル — 世界には、死刑囚の臓器を移植に使っていると問題になった国もあるそう。先に移植の日を決めて、その日に死刑を執行すれば、たしかに予定は立てやすい。

マディソン — ひどい……

アレクサンドル — だが、そうすれば受ける側は海外から飛行機で来る時間もある。ついでに観光までできる。もちろん無料じゃないだろうけど。心臓一つ、いったいいくらするんだろうな。調べたことは？

マディソン — ありません……

アレクサンドル — ネットならすぐ見つかるかもしれないぞ。

マディソン — ご親切にどうも。

アレクサンドル — 悪かった。こんなことを冗談にするべきじゃない。特に君の前ではな。でも、最後に残るのはユーモアくらいだろう？

マディソン — そうですね……

アレクサンドル — もっとも、今の話は冗談どころか、かなり現実に近いが。

マディソン — 死刑囚の心臓で生きるくらいなら、死んだほうがましです。あなたの心臓でも。……それで？

アレクサンドル — それで、何だ？

マディソン — 私の最後の夢をかなえないまま、帰らせるほど残酷なんですか？

アレクサンドル — 君は本当に頑固だな。

マディソン — 褒め言葉として受け取ります。

アレクサンドル — だが、君が嘘をついていない証拠は？

マディソン — こんな話を、誰がわざわざ作ります？ みんなに忘れられた作家からインタビューを取るためだけに。

アレクサンドル — やっと認めたな。アレクサンドル・ドラクロワは、もうみんなに忘れられてる。

マディソン — じゃあ、受けてくれるんですね？

アレクサンドル — 嘘じゃないと分かる診断書を見せたらな。

マディソン — ごめんなさい。今は持っていません。

アレクサンドル — 向かいに住んでるんだろう。取ってくればいい。

マディソン — 私の言葉を信じてくれると思っていました。少しがっかりです。

アレクサンドル — インタビューを受けたところで、がっかりするのはこれからだ。私は人をがっかりさせるのが得意でね。覚悟しておけ。

彼女は立ち上がり、部屋を見て回る。古いタイプライターに目が止まる。

マディソン — 今でもタイプライターで書くんですか？

アレクサンドル — 私の小説は全部これで書いた。だが、その手には乗らないぞ。何年も書いていないと言っただろう。

マディソン — どうして？

アレクサンドル — 言葉は紙幣みたいなものだ。出回りすぎれば価値が下がる。今の SNS を見てみる。誰もが一日に十回も二十回も、自分の意見を発信する。何についてでもだ。偽札があふれれば、本物の紙幣まで値打ちを失う。言葉も同じだ。もう何も意味しなくなっている。

マディソン — 人がおしゃべりするのは止められません。昔はカフェで、今は SNS で。それでも、あなたみたいな優れた作家はこれからもいるでしょう。

アレクサンドル — 優れた作家は、もう読まれない。引用されるだけだ。しかも文脈も関係なく、いつも同じ言葉が何度も使い回され、最後には意味が空っぽになる。コピー&ペーストが思考の代わりになり、絵文字が感情の代わりになった。

マディソン — その言葉、論文の結論に引用してもいいですか？

アレクサンドル — そうすれば私は「選ばれた少数だけが話す権利を持ち、ほかは黙って聞けと言っている」と批判される。違う。私は、全員が黙ればいいと思ってる。

マディソン — 黙祷でもします？ 一分間？

アレクサンドル — 一分じゃ足りない。一年。一世紀。千年でもいい。この数年、SNS に垂れ流されてきた言葉の洪水が止まれば、そのあとでようやく言葉に意味が戻るかもしれない。

マディソン — 面白い考えですね。でも、失恋がきっかけで書かなくなったとも言われていますよね？

アレクサンドル — 世間は好きなことを言う。

マディソン — でも否定もしない。

アレクサンドル — だから本当だとは限らない。

彼女は机の上の写真をもう一度手に取る。

マディソン — この写真の女性は誰ですか？

アレクサンドル — 君には関係ない。

マディソン — きれいな人ですね。

アレクサンドル — 君が本当に病気だとしても、私生活を詮索していい理由にはならない。

マディソン — さっき入ってきた時から、この写真が気になっていました。どこかで見たことのある顔のような気がして。

彼は写真を取り返して眺め、元の場所に戻す。

アレクサンドル — 大昔に愛した女性だ。

マディソン — あなたがヒッピーだった頃？

アレクサンドル — いや、そこまでヒッピーじゃなかった。新しい考えには開かれていたし、時々マリファナも吸った。でも健康には気をつけていたし、すでに自分の将来も考えていた。書くには、ある程度の快適さが必要だからね。大作家になるには、ときには小市民でいる必要もある。

マディソン — 彼女は？

アレクサンドル — 彼女は自由だった。先のことなんて考えず、その日その日を生きていた。

マディソン — どこで出会ったんですか？

アレクサンドル — この建物の廊下だ。彼女は向かいの部屋に住んでいた。今、君が住んでいるところだよ。世界中から来た友人たちが出入りしていてね。ミュージシャンや画家、旅人たち……昔のパリらしい、自由な芸術家たちのたまり場みたいだった。ドアはいつも開いていた。

マディソン — それで、ドアが開いていたから、ある日そのまま出ていった。私の猫みたいに。

アレクサンドル — 世界を見たかったんだ。新しい経験、新しい出会い。あの頃、伝統的なカップルなんて、私たちの理想じゃなかった。少なくとも彼女の理想ではなかった。

マディソン — でも、あなたを愛していた。

アレクサンドル — 彼女なりにはな。たぶん。ただ、愛していたのが私だけではなかった。

マディソン — フリー・ラブ……

アレクサンドル — 親の世代みたいにはなりたくなかった。それは正しかったと思う。でも代わりに何を作ればいいのかは分からなかった。少しでも長く続く何かをね。私たちは「今」を生きていた。歳を取るなんて想像してなかった。それで、三十前に死ななかつた連中は、たいていうまく歳を取れなかった。年老いたヒッピーなんて、あまり見たいものじゃないぞ。

マディソン — それで、彼女を一人で旅に行かせたんですね。

アレクサンドル — 引き止めることはできなかった。引き止める権利もなかった。ある朝、彼女は出ていった。

マディソン — どこへ？

アレクサンドル — アフガニスタン。当時は今とはまるで違って、欧米の若者たちがアジアを目指して旅する、いわゆる「ヒッピー・トレイル」の代表的な目的地だった。物価も安くて、東洋への憧れも強かった。フランスの若者にとって、あの頃のアフガニスタンは自由の象徴みたいな場所だったんだ。

マディソン — でも、あなたは残った。

アレクサンドル — 私はもう将来のことを考えていた。そして、自分の将来はアフガニスタンにはないと分かっていた。

マディソン — それでも、一緒に行けたでしょう。愛していたなら。

アレクサンドル — もちろん。一緒に来るなどとは言わなかっただろう。でも彼女が夢見ていたのは恋人同士の旅行じゃない。まして新婚旅行でもない。アジアへの旅は、自分を変えるための旅だった。仲間と一緒に遠くへ行き、二人だけの恋愛という古い型から離れるためのね。

マディソン — それであなたはパリに残った。でも、彼女を忘れられなかった。

アレクサンドル — いつか戻ってくると思っていた。せめて何か知らせが来ると。絵葉書一枚でも……でも、二度と会わなかった。

マディソン — 探そうとはしなかったんですか？

アレクサンドル — まだインターネットのない時代だ。誰かが人生から消えようと思えば、本当に消えられた。それに、年月が過ぎていった。

マディソン — 今なら探せますよ。

アレクサンドル — 何のために？ もう死んでるかもしれない。結婚して、子どもが五人いて、体重が百二十キロになってるかもしれない。

マディソン — それとも生きていて、今も魅力的で、時々あなたのことを思い出しているかもしれない。

アレクサンドル — 分からないなら、知らないままのほうがいい。私はこの写真の若い彼女を覚えていたい。四十年後に再会するなんて、ぞっとするだろう？ 自分が歳を取るのは案外気づかない。でも他人が歳を取ったのは、よく分かる。

マディソン — 私には、自分が歳を取るところを見る時間がないかもしれません。

アレクサンドル — 悪かった。言うべきじゃなかった。

間。

マディソン — 今、猫の声がしませんでした？

アレクサンドル — いや……まだ何も。

マディソン — どこかに隠れているのかも。

アレクサンドル — それだけは勘弁してほしい。

マディソン — 私が死んだら、猫の面倒を見てくれるって約束してください。

アレクサンドル — おいおい、死ぬなんて言うな。それに猫のほうが先に死ぬだろう。たぶん。猫って何年くらい生きる？

マディソン — 十五年くらいです。

アレクサンドル — 君の猫は？

マディソン — 二歳。

アレクサンドル — ……なるほど。

マディソン — それで？ 引き取ってくれます？

アレクサンドル — 君が入ってきた時、私はこめかみに拳銃を当ててたんだぞ。

マディソン — だからこそです。猫がいれば、自殺しない理由が一つできます。

アレクサンドル — 野菜入りの餌をやって、毎日トイレを掃除するために生きると？

マディソン — 誰かの世話をするために、です。あなたを必要として、あなたを待っている存在がいるために。夜、家に帰った時に。

アレクサンドル — 私を待つ？ ほとんど家から出ない。夜なんてなおさらだ。

マディソン — さっき、本当に死ぬつもりだったんですか？ それとも、誰かに助けてほしかった？

アレクサンドル — 少なくとも、君を呼んだ覚えはない。

マディソン — でも私は、その声を聞いたのかもしれませんが。

アレクサンドル — 確かに、希望を持つ理由がだんだん見つからなくなってきた。

マディソン — 話してみませんか？

アレクサンドル — 君の事情を聞いたあとで、私が落ち込む理由をずらずら並べるのは、さすがに気が引ける。

マディソン — もう負けると分かっている戦いを、それでも続ける。そういうのが本当の勇気じゃないですか？

アレクサンドル — 私が勇敢だと言った覚えはない。君みたいに勇敢ならよかったが。

マディソン — 私は勇敢なんじゃありません。選択肢がないだけです。あなたと違って。

アレクサンドル — 私だって選択肢は少ないぞ。ロープで首を吊るか、拳銃で頭を撃つか。

マディソン — そうですね……あなた、本当に気が滅入る人です。

アレクサンドル — 最初に言っただろう。私は偏屈なクソジジイなんだ。今の時代が若い頃より悪いのか、それとも私が昔より物事をよく見えるようになったただけなのかは分からない。でも、よく見えるほど、普通は楽観的にはなれない。

マディソン — やっぱ、コニャックを一杯いただきます。

アレクサンドル — 本当に？

マディソン — どうせ人は何かで死ぬんですから。

彼はコニャックを二杯注ぐ。二人はグラスを合わせる。

アレクサンドル — 君の健康に乾杯！ ……いや、また余計なことを言ったな。

彼女は微笑む。二人は飲み干す。

マディソン — 死人でも目を覚ましそう。

アレクサンドル — 私は十年くらい酒を飲んでない。この瓶がいつからあるのかも分からない。でも酒は、歳を取るほど良くなるんだろう？ 少なくとも酒飲みよりはな。

マディソン — それにしても、変な味です。本当にコニャックですか？

彼は瓶を見る。

アレクサンドル — たぶん……ただ、コニャックがどんな味だったか、もうよく覚えてない。

マディソン — 若い頃のあなたに会ってみたいかった。

アレクサンドル — どんな若者だ？

マディソン — この写真の女性を愛していて、まだ生きる情熱を持っていた頃のあなた。

アレクサンドル — 君が気に入ったかどうかは分からないな。

マディソン — きっと情熱と希望にあふれていたでしょう。

アレクサンドル — 野心にはあふれていた。

マディソン — 本当に、もう友達はいないんですか？

アレクサンドル — 老人が苦手なんだ。だから同年代にはなるべく会わない。いつも鏡を突きつけられて、自分の老いを見せられているような気がするからね。

マディソン — この何年も、まったく書いていなかったなんて信じられません。

アレクサンドル — だから私に酒を飲ませたのか？ 酔わせて秘密をしゃべらせるために。

マディソン — 作家は、書くものです。

アレクサンドル — 分かった。書いていたよ。でも、もう何も出版しない。

マディソン — なぜ？

アレクサンドル — 言っただろう。今の読者に読まれるために書いているわけじゃない。読んでくれるとしたら、未来の読者くらいだ。今の時代の読者に、私から言うことは何もない。

マディソン — 私にも？

アレクサンドル — 君のことを知らない。私が君に何か言うことがあると、どうして思う？

マディソン — あなたが思っているより、私たちには共通点があるかもしれません。

アレクサンドル — 二人とも残り時間が少ない、という以外に？

マディソン — せめて、その本が何についての小説なのか教えてください。

彼は一瞬ためらう。

アレクサンドル — とても……個人的な小説だ。

マディソン — つまり、自伝的？

アレクサンドル — 今風に言えば、オートフィクションだな。

マディソン — だから出版したくないんですか？ 個人的すぎるから？

アレクサンドル — 私としては、あの原稿は日記だと思っている。自分をさらけ出すのが好きじゃない。出版したら、歳を取って急に甘ったるい恋愛小説を書き始めたと言われるだろう。

マディソン — 人がどう思うかなんて、気にしない人だと思っていました。

アレクサンドル — どうやら、そこまで悟ることはできなかったらしい。

マディソン — そんなの無理です。

アレクサンドル — 私なんかを研究して時間を無駄にするな。そんな価値はない。

マディソン — 私には大事なんです。

アレクサンドル — なぜ？ 自分の人生を生きろ！ いつ終わるか分からないなら、なおさらだ。それに、私はまだ君を信じてない。診断書だって見せてもらってない。

マディソン — 信じていないのに、どうして結局こうして話してくれているんですか？

アレクサンドル — そんな話をでっち上げるなら、何か理由があると思った。何だ？

マディソン — 少し複雑なんです……

アレクサンドル — つまり、嘘だった。心臓は健康なんだな。

マディソン — まあ……私の「心臓の問題」は、医学的というより……心のほうなんです。

アレクサンドル — どうしてあんな話をした？

マディソン — 同情してもらいたかったんでしょうね。あなた、私を追い出そうとしていたから。

アレクサンドル — 今からでも追い出せる。

マディソン — でも、しないでしょ。

アレクサンドル — なぜだ？

マディソン — 私のことが気になってきたから。

アレクサンドル — 心臓の問題が比喩だと言ったな。つまり……失恋か？

マディソン — ある意味では。あなたと同じように、愛する人の不在に苦しみました。

アレクサンドル — それと私に何の関係が？

マディソン — もうすぐ話します。約束します。でもその前に、一つお願いがあります。

アレクサンドル — 聞くだけ聞こう。

マディソン — その原稿を読ませてください。

アレクサンドル — なぜ君に？

マディソン — 本当は、誰かに読んでもらいたいんでしょう？ 感想を聞きたい。作家はいっただって、読まれるために書く。そして認められるために。愛されるために。

アレクサンドル — 私が愛してほしかった、たった一人の人は、四十年以上前に私の人生から消えた。

マディソン — 原稿はどこに？

彼は机の上のファイルを指す。

アレクサンドル — そこだ。

マディソン — 見てもいいですか？

彼女が手を伸ばすが、彼は止める。

アレクサンドル — だめだ！

彼女は少し黙り、目に悲しそうな色が浮かぶ。

マディソン — やっぱ、あなたの言う通りです。本当に、ろくでもないじいさんですね。もう好きなだけ自分を哀れんでいてください。

彼女は帰ろうとする。

アレクサンドル — 待ってくれ。

彼はためらったあと、原稿を手に取り、彼女に差し出す。

アレクサンドル — 読んでもいい。ただし、一つ条件がある。

マディソン — 何ですか？

アレクサンドル — この原稿は、この部屋から外に出さない。

マディソン — コピーして、あなたに無断で出版するとでも？

アレクサンドル — 条件をのむか、読まないかだ。

彼女はファイルを受け取り、その重さを確かめる。

マディソン — 少し時間がかかりそう。

アレクサンドル — 私は急いでない。君は？

マディソン — 私も。

アレクサンドル — よければ客用の部屋を使えばいい。最近は誰も泊まりに来ない。友人はみんな死んでしまったからな。

マディソン — ありがとうございます。

アレクサンドル — じゃあ、読書の邪魔はしない。

彼は出ていく。彼女は原稿を読み始める。

暗転。

マディソンは肘掛け椅子に座り、まだ原稿を読んでいる。最後のページをめくり、ファイルを閉じる。しばらく考え込んだあと立ち上がり、客席側にある向かいの窓を見る。アレクサンドルがコーヒーを二杯持って入ってきて、一杯を彼女の前に置く。

アレクサンドル — どうぞ。言っておくが、デカフェだ。これで目が覚めるとは思うなよ。

マディソン — ありがとうございます。

アレクサンドル — 途中までしか読めなかったか。

マディソン — 今、読み終えたところです。

アレクサンドル — もう？ そんなはずはない。何ページか飛ばしただろう。

マディソン — 飛ばしてません。本当に。

沈黙が続き、アレクサンドルは少し不安そうになる。

アレクサンドル — 感想は言わなくていい。特に……気に入らなかったなら。

マディソン — 最初から最後まで一気に読みました。一晩中、一睡もしていません。

アレクサンドル — それなら少し安心した。サスペンス小説を書いたつもりはなかったんだが。

マディソン — あなたの最高傑作です。ほかの作品にはなかった、人間味があります。

アレクサンドル — それを褒め言葉として受け取っていいのか分からないな。少なくとも、ほかの作品については。

マディソン — ほかの小説は才気にあふれていました。でもこれは、胸を打ちます。

アレクサンドル — 気づいたか？ 君の論文のテーマにもぴったりだ。

マディソン — 私の論文……？

アレクサンドル — 『アレクサンドル・ドラクロワの小説世界における〈不在〉の表象』。もう忘れたのか？

マディソン — もちろん覚えています。そして、その通りです。二十歳の青年が、若い日の恋の亡霊だけを伴侶にして生きることを選ぶ物語……

アレクサンドル — 初恋は忘れない。初恋そのものというより、その頃の自分の若さが恋しいのかもしれない。あらゆる「初めて」があった頃の。人は初恋には忠実でいられる。最初に愛した相手には、いつも忠実とは限らないが。

マディソン — でも危険もあります。過去の中だけで生きてしまうこと。

アレクサンドル — それでも夢は捨てるな、ということだ。……それで、出版したほうがいいと思う？

マディソン — 私が「はい」と言ったら、出版します？

アレクサンドル — 君は一応、私の作品の専門家なんだろう。

マディソン — この本なら、もう一度作家として注目されると思います。フランス最高峰の文学賞だって夢じゃありません。

アレクサンドル — そこまで言うと、さすがにやりすぎだ。元気づけようとしてくれるのはありがたいが、少しくらい現実味を残してくれ。

マディソン — 本心です。本当に。

アレクサンドル — もちろん、完全に客観的な意見なんだろうな。

マディソン — 疑ってるんですか？

アレクサンドル — 分からない。ただ、君が時代遅れの作家について論文を書くためだけにパリへ来たとは、どうも思えない。

間。

マディソン — そうです。まだ全部は話していません。

アレクサンドル — 心臓病じゃない。猫もいない。学生だというのも嘘か？

マディソン — 本当なのは、私がアメリカ人で、あなたに会うためにフランスへ来たということです。

アレクサンドル — もう何週間も向かいに住んでいる。それなのに、なぜ今日なんだ？

マディソン — 昨日の朝、窓から見えたんです。あなたが天井にロープを掛けようとして、そのあと拳銃を出すのが。

アレクサンドル — ロープを掛けられる場所が見つからなかった。

マディソン — 怖くなったんです。あなたのことを何も知らないまま、いなくなってしまうんじゃないかって。だから急いでここへ来て……あとは、その場で話を作りました。

アレクサンドル — なかなかの演技だった。舞台に立てるぞ。ただし、人生も劇場も同じだ。幕の向こうに見えるものを、そのまま信じちゃいけない。時には全部が幻で、自分の願望を映しているだけかもしれない。

マディソン — あのロープは、首を吊るためじゃなかった？

アレクサンドル — ただ……シャンデリアを吊ろうとしていたのかもしれない。

マディソン — じゃあ拳銃は？

彼は引き出しから拳銃を取り出す。

アレクサンドル — おもちゃかもしれない。泥棒を怖がらせるための偽物。あるいは、拳銃型のライター。（引き金を引くと、銃口から炎が出る）もっとも、もう使い道はない。死ぬのが怖くなって煙草をやめたからな。それでも、誘惑に負けない自分を確認するため、いつも煙草は手の届くところに置いてある。酒もやめた。カフェインまでやめた。私はずいぶん健康に気をつけてるんだ。

マディソン — じゃあ、本当に自殺するつもりだったわけじゃない？

アレクサンドル — 計画まではしていない。願望なら、少し。正直、それが今の私に残った唯一の欲望かもしれない。「終わらせたい」という欲望。でも自殺するには勇気が要る。私にはその勇気がない。あるいは、まだそこまで絶望していないのかもしれない。それに何を急ぐ？ みんなと同じように、自分の順番を待てばいい。

マディソン — じゃあ、私たちが出会ったのは、ただの勘違いから？

アレクサンドル — 私みたいな作家にインタビューするためだけに大西洋を渡る人間がいるとは思えない。それに私は偶然を信じない。なぜ君はここにいる？

マディソン — これから話します。でもその前に、この原稿の最初の読者にしてくれたこと、お礼を言わせてください。

アレクサンドル — 本当に良かった？

マディソン — 傑作です。でも、一つだけ批評してもいいですか？

アレクサンドル — 来たな。そうこなくちゃおかしいと思ってた。聞こう。

マディソン — 結末だけは、少し納得できませんでした。

アレクサンドル — その通りだ。まだ終わっていない物語なんだ。エピローグが欠けているみたいに。

マディソン — 私なら、それを見つける手伝いができるかもしれません。

アレクサンドル — 君も書くのか？ 一緒に仕事をしよう？ 確かに最近は少しインスピレーションが枯れてきたが、まだ自分の代わりにゴーストライターを探すほど落ちぶれてはいないぞ。

マディソン — そのために来たんじゃないありません。

アレクサンドル — 論文の話も作り話なんだな。ということは、私と文学談義をするために、こんな芝居を打ったわけでもない。

マディソン — ええ。それだけじゃないありません。

アレクサンドル — じゃあ、なぜ？

マディソン — 答えは、今読んだ原稿の中にあると思います。『向かいの窓』……どうしてこのタイトルなんですか？

アレクサンドル — 『向かいの窓』。君が今住んでいる部屋の窓だ。昔、私が愛した女性があそこに住んでいた。

マディソン — そして、いなくなってからずっと、あなたの心に残っている。

アレクサンドル — 何度も夢を見た。ある日、彼女が戻ってきて、今日の君みたいにこのドアを押して入ってくる夢を。

マディソン — だから、いつもドアを開けているんですね。

アレクサンドル — 時々、向かいの窓のカーテンの奥に、人影が見えた気がした。君が引っ越してきて、夜に明かりがついているのを見ると、彼女じゃないかと思った。

マディソン — 私だったんです。

アレクサンドル — 君は少し彼女に似ている。だからさっき初めて君を見た時、思わずたじろいだ。二十歳の彼女が戻ってきたのかと思った。それから思い出した。今の彼女なら、私と同じくらいの歳のはずだと。

マディソン — ええ。私は彼女に似ています。

アレクサンドル — まさか、彼女の幽霊だなんて言うなよ。

マディソン — いいえ。私はちゃんと生きています。

アレクサンドル — でも、まだ何かあるんだな？

マディソン — はい。

アレクサンドル — どうしてあの写真の顔を見て、「見覚えがある」と言った？

間。

マディソン — 私は、彼女の孫です。

沈黙。

アレクサンドル — 孫……？

マディソン — 彼女がアフガニスタンへ旅立った時、妊娠していたんです。出発してから間もなく気づいたそうです。

アレクサンドル — 妊娠……私の子を？

マディソン — はい。

アレクサンドル — なぜ何も言わなかった？

マディソン — あなたが言ったでしょう。あれは別の時代だった。彼女は、子どもを理由にあなたを縛りたくなかったんです。一人で育てられると思った。そして、本当に一人で育てました。

アレクサンドル — 私は何も知らなかった。

マディソン — 私もです。少なくとも、少し前までは。

アレクサンドル — いつ知った？

マディソン — 数年前です。十八歳になった時、祖母が話してくれました。あなたとの恋のことを。

アレクサンドル — じゃあ君は……私の孫？

マディソン — はい。あなたの孫です。（間）信じられませんか？

アレクサンドル — いや……不思議なことに、あれだけ嘘をつかれたあとでも、これは疑う気にならない。

マディソン — 突然すぎますよね。ゆっくり考えてください。私のことを受け入れる義務なんてありません。望むなら、このまま帰ります。もう二度と姿を見せません。

アレクサンドル — いてくれ。お願いだ。

マディソン — ここにいます。

間。

アレクサンドル — あの時、何も言わなかったのは分かる。でも、そのあとも？

マディソン — 言ったでしょう。彼女はあなたに父親になることを押しつけたくなかった。それに、その後あなたの居場所が分からなくなりました。

アレクサンドル — 彼女が去ってしばらくして、私もこの部屋を出たんだ。毎日あの窓を見るのが耐えられなかった。彼女がいないことを、ずっと見せつけられているようで。

マディソン — ずっと昔、祖母はあなたに手紙を出しました。でも「この住所には住んでいません」と書かれて戻ってきたそうです。

アレクサンドル — ここへ戻ってきたのは数年前だ。この本を書くために。過去を乗り越えられるかと思って。

マディソン — でも、彼女の影は、ずっとあなたから離れなかった。

アレクサンドル — もちろん、その後ほかの女性とも付き合った。でも私はずっと、最初の恋の思い出の中で生きてきた。本当に愛したのは、彼女だけだった。

マディソン — 祖母は、あなたが結婚したかもしれないと思っていました。別の家庭を持ったかもしれないと。

アレクサンドル — そんなことはなかった。

マディソン — あなたが有名な作家になった時、祖母もあなたのことを知りました。

アレクサンドル — 私が必死で作家として成功しようとしたのも、彼女にもう一度見つけてもらいたかったからだ。名前が知られば、彼女も私の居場所を知るだろうと思った。あの時なら、連絡できたはずだ。

マディソン — でも祖母は、あなたが成功したあとに現れたら、名声やお金が目的だと思われるんじゃないかと怖かったそうです。

アレクサンドル — じゃあ、私には娘がいたのか……

間。

マディソン — 私の病気についても、全部が嘘だったわけじゃありません。心臓が弱かったのは、私の母です。私が生まれて間もなく亡くなりました。自分の父親が誰なのかも知らないままで。

アレクサンドル — それは……残念だ。

マディソン — 私を育てたのは祖母です。そして私が大人になった時、自分の祖父が誰なのか知ってほしいと思った。でも、祖母自身はあなたに連絡する勇気がありませんでした。

アレクサンドル — それで、代わりに君がパリへ来た。

マディソン — 手紙や電話で伝える話じゃないと思ったんです。まず会って見たかった。あなたは、かなり気難しい人だと聞いていました。もし本当に嫌な人だったら、何も言わずニューヨークへ帰るつもりでした。

アレクサンドル — ところが私は、あまりにも温かく君を迎えた。それで祖父として採用されたわけか。

マディソン — それもあります。でも一番大きかったのは、この原稿です。あなたが、あの女性を一度も忘れていなかったと分かった。私の祖母を。

アレクサンドル — 来てくれて良かった。そして、この物語の結末を教えてください。

マディソン — まだ完全な結末じゃありません。（アレクサンドルが身構える）大丈夫ですか？

彼は感情を隠すため、冗談めかして答える。

アレクサンドル — 自分の歳だけでも落ち込んでいたのに、今度は祖父だと知らされた。

マディソン — うれしくないんですか？

アレクサンドル — もちろんうれしい。でも同時に、娘がいたことと、その娘がもう死んでいることを知ったんだ。

マディソン — でも私はここにいます。母のことはほとんど知りません。代わりに、祖父を見つけました。

アレクサンドルは原稿を手取る。

アレクサンドル — この本は出版する。そして、一度も会えなかった娘に捧げる。それから、ある日突然、人の家に勝手に入ってきた孫にも。

マディソン — ドアは開いていました。

アレクサンドル — でも、この小説にはまだ本当の終わりが必要だ。

マディソン — それなら、手伝えると言ったでしょう。

アレクサンドル — これ以上驚かされたら、今度こそ私の心臓がもたないかもしれない。

マディソン — 実は、あと一つだけあります。

アレクサンドル — 言ってくれ。ここまで来たら、何でも聞く。

マディソン — 祖母は、生きています。

アレクサンドル — 今、どこに住んでる？

マディソン — ニューヨークです。

アレクサンドル — じゃあ、私の分まで、優しくキスしてやってくれ。

マディソン — ご自分でできますよ。

アレクサンドル — 私をアメリカに連れて帰るつもりか？

マディソン — 祖母も一緒にパリへ来ています。向かいの部屋にいるんです。

間。彼は完全に言葉を失う。

アレクサンドル — ……今度こそ、本当に怖くなってきた。

マディソン — 今でも、とてもきれいな人です。そして、あなたのことを忘れたことはありません。あなたの本も全部読んでいます。

アレクサンドル — でも、作者の人生を知ろうとはしなかった。

マディソン — そんなものは作品とは関係ないって、あなた自身が言っていたでしょう？

アレクサンドル — この小説に出てくる「不在の人」は、彼女なんだ。

マディソン — ええ。でも祖母は、まだこの本を読んでいません。あなたが今でも覚えているか分からなかった。今でも愛しているかどうか。

アレクサンドル — 愛している。この本そのものが、その証拠だ。

彼は客席の方向、向かいの窓を見る。

マディソン — それで？ 祖母を呼びましょうか？

アレクサンドル — 彼女は私に会うために大西洋を渡ってきた。私も、せめて廊下くらいは渡って会いに行ける。

アレクサンドルはマディソンにキスをする。

マディソン — 一人で行ってください。きっと分かります。向かいの窓の向こうは、昔とほとんど変わっていません。ドアも、今でも開いています。

彼は出ていく。マディソンはその場に残り、向かいの窓を見つめる。

暗転。

終

著者について

ジャン＝ピエール・マルティネス

1955 年、フランスのオーヴェル＝シュル＝オワーズ生まれ。

若い頃にはいくつかのロックバンドでドラマーとして活動した後、広告分野の記号論研究者として仕事を始める。その後、テレビドラマの脚本家として活動し、やがて演劇の世界へと進み、戯曲を書くようになる。

これまでに数多くのテレビ脚本と 100 本を超える戯曲を執筆。その作品はフランスをはじめ世界各国で上演され、多くの言語に翻訳されている。

ジャン＝ピエール・マルティネスの作品は、現代社会、人間関係、権力、偶然、アイデンティティといったテーマを、ユーモア、風刺、不条理、時にはブラックユーモアを交えながら描いている。

戯曲の多くは、著者の公式サイトで無料で読むことができ、PDF でダウンロードすることもできる。

ジャン＝ピエール・マルティネスの日本語版戯曲：

jeanpierremartinez.net — 日本語版戯曲

著作権および上演について

著者：ジャン＝ピエール・マルティネス

翻訳・翻案：著者

本作品は著作権によって保護されています。

この戯曲のテキストは、個人的な読書を目的として無料で読むことができ、ダウンロードすることもできます。

ただし、プロ・アマチュアを問わず、公の場で上演する場合には、事前に著者の許可を得る必要があります。

上演には、所定の著作権使用料が発生する場合があります。

著者の事前の許可なく、本作品の全部または一部を上演、翻案、複製、公開することはできません。

ジャン＝ピエール・マルティネスの作品の上演を希望される場合は、著者本人に直接お問い合わせください。

お問い合わせ：

<https://jeanpierremartinez.net/en/contact-2/>

ジャン＝ピエール・マルティネスの戯曲：

jeanpierremartinez.net — 日本語版戯曲

© La Comédiathèque